The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中期ハイデガーにおける存在思惟の変遷
Author(s)	西松, 豊起
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2002, 36, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12503
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中期ハイデガーにおける存在思惟の変遷

西松豊起

カタリーナ・ボーアマンは『関係としての世界』で次のように述べている。「ハイデガーは一般に形而上学の超克者（Überwinder）と呼ばれている。彼自身もまた長い間そのように自らを理解していた…。しかし後期のハイデガーにとっては…『超克することを断念して、形而上学をそれ自身に委ねること』（ZSD, 25）が肝要であった」。[1] 確かに『哲学への寄与』（1936/38）では、「主導の問い」に従って存在者の存在のみを問うてきた形而上学の歴史から「原存在」（Seyn）の真理を問う「根本の問い」への移行によって、存在忘却の歴史である形而上学を超克（Überwinden）することが企てられていた。だが後にハイデガーは、超克によって単に形而上学を乗り越え、過去のものにするのではなく、形而上学のこれまで覆蔵されていた本質の内へと転じ入って、その本質を初めて見出す「耐忍」（Verwindung）という立場に立つことになる。「形而上学をそれ自身に委ねる」とはまさに形而上学の耐忍に他ならない。ところで、超克から耐忍への立場の変更の背景には、形而上学が変貌した在りようにおいてハイデガーの眼に映るようになったという経緯が潜んでいたはずである。この論考では、その経緯を彼の存在思惟の変遷という視点から跡づけることを試みるが、その際この試みへの導入とされるのは、中期ハイデガーにおける「存在の真理」についてのラディカルな思想の批判的検討である。

1．存在の真理

ハイデガーは、1930年代から40年代半ばにかけて存在の真理についての独特の思想を形成する。1930年に思惟され43年に初めて出版された講演『真理の本質について』の第六節冒頭には、「覆蔵性は*ἀλήθεια*に対して露現することを拒絶し、*ἀλήθεια*を未だ*στέρησις*（剝奪）としては許容せず、むしろ*ἀλήθεια*のために最も固有なものを財として保ち護る」(GA9, 193）という難解な一節がある。1935/36年の『芸術作品の根源』では、非覆蔵性としての真理の本質には、存在者の拒むことと偽装することという二重の覆蔵という仕方での拒絶が属しており、従って真理はその本質においては非－真理であるとされている（GA5, 41)。以上のような覆蔵性と非覆蔵性との緊張関係は、『哲学への寄与』や、同時期の1937/38年冬学期講義では、簡潔に集約されて「真理とは明け開きつつ覆蔵することである」(GA65, 70）とか、「自らを覆蔵することの明け開けとしての開性」(GA45,187）などと言われている。そして1943年には、夏学期のヘラクレイトス講義で講演された『アレーテイア』―― その解明は以下に行なう ―― があり、更に1946年の『アナクシマンドロスの箴言』では「真理(Wahrheit）とは存在の護り（Wahrnis)であり、そして存在は現前としてこの護りの内へと属せしめられるべきである」(GA5, 348）と述べられている。これらの真理論の核心は、畢竟覆蔵性が覆蔵性そのものとして明け開かれ、人間によって見護られるということに帰着するのだが、そのことを『アレーテイア』に即して見てゆくことにする。

『アレーテイア』でハイデガーはヘラクレイトスの断片16を解釈している。その断片16は次の通りである。

τὸ μὴ δῦνόν ποτε πῶς ἄν τις λάθοι;

ディールス＝クランツのドイツ語訳は

Wie kann einer sich bergen vor dem, was nimmer untergeht?
(決して没しないものから人はどうして身を匿うことができようか)

ハイデガーは、*μὴ … ποτὲ* という否定を分詞 *δῦνον* の動詞的意味に関わるものと見て、*τὸ μὴ δῦνόν ποτε* という語の接合が言っているのは、なんといっても実にかつて没したことがないということ (das doch ja nicht Untergehen je) だと解釈する (VA, 261)。これを肯定的に言い換えれば、ヘラクレイトスは永続的な立ち現れること (das immerwährende Aufgehen) を思惟していることになる。そして、かつてより持続している立ち現れることは *φύσις* と名づけられる (ebd.)。しかし、*φύσις* は根本においては決して単に立ち現れることではない (VA, 262)。断片123には次のようにある。

Φύσις κρύπτεσθαι φιλεῖ.

すなわち、立ち現れること（自らを露現すること）は自らを覆蔵することを好むというのである (VA,262)。*κρύπτεσθαι* は自らを覆－蔵すること (Sichver-bergen) として、単に自らを閉ざすことではなく、蔵し匿うこと (Bergen) であって、この蔵し匿うことのうちに立ち現れることの現成可能性 (Wesensmöglichkeit) がどこまでも護り保たれており、立ち現れることそのものはこの蔵し匿うことの内へと属せしめられるべきなのである。自らを覆蔵することは自らを露現することにその現成を保証する。また逆に、自らを覆蔵することのうちには、自らを露現することへの好意を抑制することが統べている。そのようなわけで *φύσις* と *κρύπτεσθαι* とは相互に分離されているのではなく、相互に向き合い好意を抱き合っている。両者は同じこと (das Selbe) である。こうした好意において一方

は他方に初めて固有の現成を許し与える（VA, 263)。自らを露現することは、覆蔵することを決して除去しないのみならず、むしろそれが蔵しを—解除すること（Ent-bergen）として現成するがままに現成するためには、覆蔵することを必要とするのである（VA, 263f.)。

ここでは φύσις とは、ただ単純に立ち現れることではなく、常に覆—蔵することとしての覆蔵から立ち現れることとして、自らを覆蔵することにどこまでも好意を抱き続けているものであることが解明されている。ところで『ニーチェ』第二巻所収の『存在の歴史としての形而上学』(1941) によれば、存在はその歴史の原初において、立ち現れ（Aufgang, φύσις）および露現（Entbergung, ἀλήθεια）として自らを明け開いたとされる (N II, 403)。従って、原初においては存在は自らを覆蔵しつつ自らを露現していたということになる。存在そのものにおいて存するこの覆蔵と露現という動向は相反するもののように見えるが、しかしハイデガーはこの二つの動向を、二つの異なった、ただ相互に押し退け合う出来事ではなく、一にして同じことであると言う（VA, 262)。このことをどう理解すればよいのか。『講演「時間と存在」に関するゼミナールに寄せてのプロトコル』(1962)（以下『プロトコル』と略記）では次のように言われている。「存在忘却は形而上学の本質を成しており、そして『存在と時間』にとっての刺激となったのであるが、その存在忘却は存在それ自身の現成に属している」(ZSD, 32)。存在それ自身の現成には存在忘却という欠如相が属しているというこうした考え方の根拠になっている根本経験は、ハイデガーの前期の思索のうちに求めることができると思われる。別の論考で考察を試みたので詳述は避けるが、中期以降「存在それ自身」として問題化されるようになったと解釈できる世界の世界性が、不安においては「世界の無」(SZ, 343) という様相において現出してくるというところに、存在それ自身の本質的な欠如相の根本経験があったのではないかと考えられる。

そしてこの本質的な欠如相の経験が、中期以降の思索において存在それ自身の覆蔵性や欠在（Ausbleiben）や脱去（Entzug）として解釈されたのであろうと思われる。[2] 従って、存在それ自身の現成には覆蔵性が属していると言える。そして、存在そのものにおいて覆蔵と露現という動向が存しているとは、存在の露現において存在の覆蔵性が蔵し匿われているということに他ならない。存在が自らを露現することにおいても、存在の覆蔵性が護られている。あるいは更に端的に言うならば、存在それ自身の現成には本質上覆蔵性が属しているのである以上、存在の露現とは存在の覆蔵性が覆蔵性そのものとして明け開かれる事態を指しているのである。しかし覆蔵性は本質上自ら自身を覆蔵するという動向を伴っているために、覆蔵性が覆蔵性として明け開かれて保たれるためには人間による見護りが必要とされる。そして覆蔵性の明け開けと人間による見護りとのこの共属関係において存在の真理が現成する。つまり存在の真理、存在の非覆蔵性とは、存在が覆いを破ってそれ自体として露わに立ち現れてくるというようなことではなく、むしろ存在が、欠在し覆蔵されたままの相において人間に自らを露現し、見護られるという出来事を指しているのである。このことはこの節の冒頭に挙げた『真理の本質について』の一節に対応している。そこで言われている*στέρησις*とは、*λήθη*すなわち覆蔵性から見た*ἀλήθεια*つまり非覆蔵性を指している。従って、覆蔵性が*ἀλήθεια*を未だ*στέρησις*としては許容しないということは、未だ*λήθη*の剝奪ではないような“*ἀλήθεια*”を覆蔵性がそれ自身に応じて要求しているということである。そのような“*ἀλήθεια*”においては、覆蔵性は飽くまでも覆蔵性そのものに留まり続ける。しかし、そうした事態がいやしくも“*ἀλήθεια*”と呼ばれ得る以上、覆蔵性はそれ自身更に覆蔵されてしまうことなく、却って覆蔵性として人間に顕わになるのでなければならないのである。

2.「存在は決して存在者なしには現成しない」

存在の真理についての以上のようなハイデガーの思想は確かに深遠なものではあるが、しかしそれは人間にはあまりにも高すぎる使命を課してはいないだろうか。「存在の牧人」(GA9. 331) あるいは「原存在の開性の番人」(GA45, 190) として存在の真理を護ることは確かに人間が存在者に関わり得るための条件ではあるが、しかし偏に存在の覆蔵性を覆蔵性として純然と見護ることのみを人間の最高の使命とするハイデガーの要求は、存在者に関わることを人間に禁じることになりはしないであろうか。果たしてそれが、人間の本質的な在り方についての、現実に即した見方であると言えるであろうか。それにも拘らず、『哲学への寄与』では、「別の原初」(der andere Anfang) への移行は「原存在の台頭と、現存在のうちに原存在の真理の根拠を据えることとを、存在者のあらゆる出来と認取 (Vernehmen) とから分かつ」(GA65, 177) とハイデガーは言うのである。しかし、人間は存在者に関わることなく、ひたすら存在の真理だけを護ることができるのであろうか。存在それ自身は存在者から分かたれてそれ自体だけで現成し得るでのあろうか。

『ニーチェ』第二巻所収の『ニヒリズムの存在史的規定』(1944/46) のなかには次の一節がある。「存在は、どこかにそれ自体として隔離されていて、その上で更に欠在するのではない。そうではなく存在そのものの欠在が存在それ自身なのである。欠在において存在それ自身は自ら自身で以て身を隠す。自ら自身へと消え失せるこのヴェールとして存在それ自身は欠在において現成するのであるが、このヴェールが存在それ自身としての無である」(N II, 353f.)。ここで、存在そのものの欠在が存在それ自身であると述べられていることによって、存在それ自身を実体化して捉える表象は封じられる。存在それ自身は自らを覆蔵してこそ初めて存在それ自身

として現成し得るのであり、この覆蔵性は「自ら自身へと消え失せるヴェール」あるいは端的に「無」と言われている。しかしながら問題であるのは、「自ら自身へと消え失せるこのヴェールとして存在それ自身は欠在において現成する」と言われるように、覆蔵性あるいは無はそれ自体だけでそのものとして現成し得ると考えてよいのかということである。『根拠の本質について』の「第三版への序言」(1949) で述べられているように、無は、存在者の方から経験された存在 (GA9, 123) としてなら現成するであろう。また『形而上学とは何か』(1929) で言われているように、無が、滑り去りつつある全体としての存在者へ全体として拒絶的に指示するという無の無化 (GA9, 114) も、不安のうちで経験され得るであろう。だが、無は存在者とは無関係にそれ自身だけで現成し得るであろうか。

『ニヒリズムの存在史的規定』を挟んで『形而上学とは何か』第四版 (1943) の『後記』と第五版 (1949) の『後記』が出版されている。これら二つの『後記』の間には、しばしば議論の的になる異同がある。第四版の『後記』では、存在の真理には「存在は確かに存在者なしに現成する」ということが属している (GA9, 306, Anm. 2) と述べられているが、第五版以降では「存在は決して存在者なしには現成しない」と改められている。『ニヒリズムの存在史的規定』は1944/46年の論考であるから、二つの『後記』の間の微妙な時期にあるのだが、同論考のなかの問題の箇所として今しがた引いておいた一節は第四版の『後記』の考えを引き継いでいると思われる。すなわち、存在がそれであるところの覆蔵性あるいは無はそれ独自で存在者なしに現成するというのである。しかし、このような考え方は、無の、従って存在の実体化に再び陥っているのではないであろうか。そうではないとすれば、無や覆蔵性を純粋にそのものとして直視するなどということは理想論である。『形而上学とは何か』で述べられているように、「無は自らへと引き寄せるのではなく、本質上拒絶的である」(GA9, 114)。

確かに無の経験はあり得る。それどころか、現－存在とは無の内へと保ち入れられていることでさえある（GA9, 115）。しかし、その無は全体としての存在者へと拒絶的に指示するのである。従って、現存在が予め無の内へと保ち入れられている限り、現存在は必然的にしかも本質上存在者と関わるのである。だとすれば、無は決して存在者なしには現成しないと考えるべきであろう。そして無は、現存在が存在者へと関わることを可能にしている限りで存在と同じもの（das Selbe）であるから（GA9, 115, Anm. c）、第五版の『後記』で「存在は決して存在者なしには現成しない」と改訂されたのは正当であったと言える。つまり存在は、それが存在者では無いという限りでの無として、飽くまでも存在者との関連においてしか現成しないのである。第四版の『後記』におけるハイデガーは、まだ30年代から40年代半ばにかけての存在の真理についてのラディカルな思想のなかにあったために、存在は存在者なしに現成すると考えてしまったのであろうが、第五版の時期には冷静さが取り戻されたのだと思われる。

第五版の『後記』と同年に行なわれたブレーメン連続講演の第一講演『物』では「物が物する」（Das Ding dingt.）と言われる。これは或る物が、「四方域」（das Geviert）と呼ばれる世界を集摂しつつ一性起させつつ（ereignend）暫しのあいだ滞在させること（GA79, 13）において現出してくる様を言い表している。四方域とは、大地と天空、神的なる者たちと死すべき者どもの各々がそれなりの仕方で他の三者の本質を反映し合い、その際これらの四者が向かい合う一重の内部でそれぞれの仕方で自らの固有なものの内へと映り返るという「映―動」（Spiegel-Spiel）によって 性起させられる世界である（vgl. GA79, 18f.）。O．ペゲラーによれば、世界が四つのものから成るという思想は、古代における神話的な世界経験、中国の文献、ヘルダーリンの詩作によって証拠立てられているという。[3)] 従って四方域の思想には何らかの必然性があるのではあろうが、しかしそ

れが如何なる必然性であるのかということは差し当たり我々には閉ざされている。それ故に、物が物するということを四方域から思惟しようとすると、我々はエゾテーリシュな議論に陥ることを免れないのではなかろうか。そうした事態を避けるためには、むしろ物が物するということは、》Das Ding ist.《における》ist《の方から思惟されなければならないと思われる。すなわち、存在忘却に応じてこれまで言わば空疎化していた》ist《がその固有な意味において充溢し、それに伴って、》ist《と述定される物が、存在それ自身から見棄てられているという状態すなわち存在者の「存在棄却」(Seinsverlassenheit) から脱するわけである。物が物するということをこのように考えるならば、それは存在と存在者とが一体となって現成することを指しているのであり、これは存在を一面的に強調しすぎた中期の存在の真理についての思想の修正であったと見ることができる。

3．存在それ自身と存在者性

存在を存在者との関連において思惟するこのような考え方は、晩年の講演『時間と存在』(1962) でもなお維持されている。この講演では、「存在者なしに存在を思惟する試みが必要となる」(ZSD, 2) と言われており、この箇所だけを取り上げると再び『形而上学とは何か』第四版の『後記』の考え方に逆戻りしたかのように思われるが、そうではない。あらゆる形而上学においては「存在は、ただ存在者の方から且つ存在者のために、その根拠として究明され (ergründet) 解釈されるにすぎない」(ZSD, 6) が故に、この講演で肝要なことは「存在者から存在を基礎づけること (Begründung) への顧慮なしに存在を思惟する試みについて若干のことを言うことである」(ZSD, 2) とされる。そして、この試みが「存在者なしに存在を思惟する試み」という表現に簡約されるのである。それ故に、この表現が意味しているのは「存在にとっては存在者への関連は本質的で

ないとか、この関連が度外視されるべきであるということではない」(ZSD, 35) と、『プロトコル』で断られているわけである。

このように見るならば、『形而上学とは何か』第五版の『後記』の記述への改訂は、ハイデガーの存在思惟の変遷を考える上で決定的に重要な位置を占めていると言えるが、この改訂と本質的な連関にあると思われる思想が『ニーチェ』第二巻所収の1941年の論考『形而上学への回想』のなかに既に認められる。形而上学の存在－神論 (Onto-Theologie) という体制においては、[4] 存在者の存在は存在者から存在者の根拠として基礎づけられて —— 尤も、それは最高度に存在するもの (das Seiendste) による基礎づけであるが —— それ自身一つの存在者へと置き移されてしまう。存在史としての形而上学の歴史を通じて、プラトンにおけるイデアからニーチェにおける力への意志に到るまで様々に名指されてきた存在者の存在は、このように既に存在者へと置き移された「存在者性」(Seiendheit) なのであるが、しかしそうした存在者性の集摂態としての存在史とは無関係に、存在それ自身が自体的に現成することはあり得ないとする考え方が『形而上学への回想』では打ち出されている。そのことは、「存在史とは存在それ自身であり、そしてただこれのみである」(N II, 489) という言明によって表明されている。また、『ニヒリズムの存在史的規定』のなかの次の一文もこれと同じことを言っている。「既—在 (das Ge-Wesen) に基づいて、そして既—在として、存在それ自身の到来はある —— たとえ欠在しつつ脱去するという形においてではあるにせよ」(N II, 388)。既—在とは、差し当たり、存在忘却の歴史としての存在の歴史が、存在の現成の内へと集摂され、この存在の現成の支配している現在においてもなお効力を保ち続けているという歴史の在り方を指している。これに従えば、存在忘却の歴史がその内へと集摂された存在の現成としての既－在とは存在忘却の集摂態に他ならないということになる。しかし、存在忘却の集摂態は、

存在それ自身がそれへと摺り替えられた存在者性の集摂態という形態をとって現成する。そして、この存在者性の集摂態として現成する既一在を措いて他に存在それ自身の到来はあり得ないと、上の一文は言っているのである。[5)]

ここでは、存在それ自身を、存在者性の背後に控えている超越者であるかのように見做すプラトニズムの蒸し返しのような考え方は固く戒められる。ソシュールの喩えを借りて言えば、存在それ自身と存在者性とは一枚の紙の裏表のように切り離すことができない関係にある。形而上学は存在忘却の歴史であるが、それは存在それ自身の側から言えば、それが脱去する際にイデアから力への意志に到るまでの様々な存在者性という相において自らを思想家たちの思惟に遣わしてきた歴史である。従って、存在者性は存在それ自身の脱去の言わば痕跡であると言える。しかし、その脱去は存在それ自身の現成に属しているのである以上、この痕跡としての存在者性は等閑にはできない。存在それ自身が遣わしてくる存在者性の集摂態としての歴運（Geschick）を離れて存在それ自身の現成はあり得ないのである。もちろん、遣わし（Schicken）が集まって（ge-）歴運（Geschick）になるというのはハイデガー独特のエテュモロギーである。しかし1969年のル・トールでのゼミナールでは、形而上学の異なった諸々の根本的立場は、原初的な意味の、相継起するそのつど新たな諸変転として積極的に理解され得、そしてその諸変転は「唯一の歴運の統一において共属している」（VS, 77. 強調は引用者）と言われる。「唯一の歴運」ということが意味しているのは、例えばプラトンにとっては存在は定立（Position）としてでも力への意志としてでもなく、イデアとしてしか思惟されず、その意味でそれは唯一性において遣わされたとしか言えないということである。その限りで、諸々の存在者性の思惟の集摂態は歴史的に制約された運命という意味での歴運なのである。そして、この歴運を措いて他に

存在それ自身の現成はあり得ないということに目覚めることが「性起」(Ereignis) の内への思惟の転入に他ならないと言える。しかし、そのためには、形而上学の歴史においてはそれ自身忘却されていた歴運としての存在忘却が初めて存在忘却として経験されることが前提となる。性起は形而上学を、自らの存在忘却に目覚めた対自態へと変貌せしめるのである。

4．形而上学の超克から形而上学の耐忍へ

確かに『プロトコル』では、性起の内へと転入する思惟にとっては、歴運のうちに存する存在はもはや殊更に思惟されるべきことではなく、存在史は終末に達したと言われている (ZSD, 44)。しかし、その場合の「歴運」とは、即自的な在り方における歴運を、すなわち存在忘却が現成する際にとる形態である存在者性の集摂態として対自化されていない限りにおける歴運を、指していると考えられる。それに対して、性起の内への転入によって歴運としての形而上学の歴史が対自態へともたらされ、形而上学が自らの存在忘却をそれとして経験するならば、その形態の下に存在忘却が現成するところの存在者性と存在それ自身との、微妙ではあるが解消し得ない差異を見護ることが思惟の課題となる。その場合には、歴運のうちに存する存在つまり存在者性は、存在それ自身との表裏の関係ではあるが決して等しいもの (das Gleiche) へと還元できない差異において思惟に値するものとなり、従って形而上学はその存在―神論的体制においてどこまでも思惟の事柄であり続け、決して超克されるべき歴史などではないのである。

先の『形而上学への回想』からの一文は、存在史とは存在それ自身であると言っていた。存在史としての形而上学が存在それ自身に他ならないならば、形而上学の歴史を別の原初への移行によって超克しようとすることは存在忘却の徹底化に他ならないであろう。言うまでもなく、それはハイ

デガーの本意に反することである。形而上学は安易に超克され得るものではないし、また超克されてもならない。別の原初への移行とは、むしろ形而上学を形而上学として その自明性から掘り起こし、それを対自態として現成させるものである。形而上学からの移行におけるこの形而上学の歴史の現成の経験は、形而上学の終末の経験ではなく、形而上学の「終わり―ゆき」(Ver-endung, VA, 67) の経験であるとされる。これは1936年から46年にかけて書き留められた手記『形而上学の超克』からの言葉であるが、この手記ではもはやハイデガーは形而上学の超克という立場に立ってはいない。その手記では次のように言われている。「我々は、形而上学が終わりゆくことの或る予感に基づいて形而上学の外部に立っているなどと錯覚してはならない。というのも、超克された形而上学は消滅するわけではないからである」(VA, 68)。存在者を存在者として表象するにすぎない形而上学を超克しようとして存在の真理をラディカルに追究しすぎるあまり、「存在は存在者なしに現成する」という考え方に固執する立場は、存在の真理についての理想論でなければ存在それ自身の実体化に陥ることになるのであった。存在それ自身が実体化されるということは、形而上学の存在－神論的体制の回帰以外の何ものでもないであろう。ここで形而上学超克の企図はジレンマに立たされることになる。このジレンマの経験を通じて後期のハイデガーは形而上学の耐忍という立場に立つことになる。そしてこの耐忍において、形而上学に対して、存在それ自身の脱去というその覆蔵されていた本質が初めて返し与えられることにより、形而上学がこれまでとは違った新たな相を我々に示すようになるのである。『存在の問いへ』(1955) は次のように言う。「外見上は追放されたかに見える形而上学、その形而上学の存続する真理が、今や形而上学の我がものとされた本質として、耐忍において初めて殊更に還帰するのである」(GA9, 416)。

註

ハイデガーのテクストからの引用その他は以下の略号を以て行なう。

GA　Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M.

SZ　*Sein und Zeit*, 17.Aufl., Max Niemeyer, Tübingen 1993.

VA　*Vorträge und Aufsätze*, 7.Aufl., Günther Neske, Stuttgart 1994.

NII　*NietzscheII*, 5.Aufl., Günther Neske, Pfullingen 1989.

ZSD　*Zur Sache des Denkens*, 3.Aufl., Max Niemeyer, Tübingen 1988.

VS　*Vier Seminare*, Vittorio Klostermann, Frankfurt a.M. 1977.

1）Katharina Bohrmann, *Die Welt als Verhältnis. Untersuchung zu einem Grundgedanken in den späten Schriften Martin Heideggers* (Peter Lang, Frankfurt am Main/Bern/New York) 1983, S.11.

2）拙論「世界に住まうこと ── ハイデガーの思惟に即して ──」、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、『メタフュシカ』、第32号、2001年、85頁以下、特に88頁以下を参照。

3）Otto Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, 2.Aufl.,(Günther Neske, Pfullingen) 1983, S.248.

4）『ヘーゲルの経験概念』(1942/43) では》onto-theiologisch《という語が使われている (GA5,200)。アリストテレスは存在者を存在者として注視する学を第一哲学と名づけたが、この第一哲学は存在者をその「存在者性」(Seiendheit) において考察するだけではなく、存在者性にまさしくふさわしい最高の存在者すなわち神的ナルモノ (τὸ θεῖον) をも同時に考察する。それ故に第一哲学は、存在論として、同時に真に存在するものの神学 (Theologie) であるが、無論それは宗教における θεός についての学を意味しているのではなく、形而上学において causa sui (自己原因) と呼ばれているものについての学である。それ故に、哲学における神は θεός とは区別されて θεῖον と呼ばれるべきであり、それに応じて、存在論が同時に必然的にそれであるところの Theologie は、更により一層厳密に言えば Theiologie である。従って第一哲学は onto-theiologisch である。

5）こうした考え方の打ち出された時期が、1940年代において、存在の真理についてのラディカルな思想の時期と重複することに関しては、40年代を過渡期と見做すより他はないであろう。

(博士後期課程単位修得退学)

Der Wandel des Seinsdenkens in spätem Heidegger

Toyoki NISHIMATSU

Der eigentümliche Gedanke von der Wahrheit (Unverborgenheit) des Seins in spätem Heidegger fordert, daß Menschen die Verborgenheit des Seins selbst, die zum Wesen desjenigen gehört, als solche verwahren. Dieser Gedanke aber erlegt dem Menschen eine zu hohe Bestimmung auf und ist äußerst radikal. Wenn unsere höchste Bestimmung darauf beschränkt wird, ausschließlich die Verborgenheit des Seins als solche zu verwahren, wird es dann nicht unmöglich, daß wir mit dem Seienden zu tun haben? Kann Sein ohne das Seiende wesen? In dem *Nachwort* zur vierten Auflage von *Was ist Metaphysik?* sagt Heidegger:„ … zur Wahrheit des Seins gehört, daß das Sein wohl west ohne das Seiende",aber in dem *Nachwort* zur fünften Auflage wird diese Stelle umgeschrieben wie folgt:„ … daß das Sein nie west ohne das Seiende." Hier läßt sich eine Vertiefung des radikalen Gedankens von der Wahrheit des Seins erblicken.

Der Gedanke, der in wesentlichem Zusammenhang mit dieser Vertiefung steht, ist in *Nietzsche Bd. II* dargestellt. Der Kern dieses Gedankens besteht darin, daß das Sein selbst nie an sich wesen kann anders als qua Versammlung der Seiendheit des Seienden, d.h. des Seins des Seienden, die im onto-theologischen Grundzug der Metaphysik wiederum in das Seiende verlegt wird. Die Seiendheit ist die Spur des Entzugs des Seins selbst, aber dieses und die Seiendheit lassen sich nicht auseinandertrennen wie die zwei Seiten eines Blattes Papier. Daher gerät der Versuch in ein Dilemma, die Metaphysik deshalb überwinden zu wollen, weil in ihr Sein selbst sich entzieht. Durch die Erfahrung dieses Dilemmas stellt sich Heidegger später auf den Standpunkt der Verwindung der Metaphysik, wodurch die Metaphysik uns anders als bisher neue Aspekte aufzeigt.

キーワード：存在の真理　存在－神論　存在者の存在者性　形而上学の超克　形而上学の耐忍